

フィリピン話の続きである。

1978年10月12日、西武鉄道の親会社であった国土計画が、日本野球界の猛獣ライオンズをクラウンライターズから買い取り西武ライオンズとなった同じ日に、ノースウエスト航空、シカゴ発成田経由フィリピン・マニラ行きに乗り込む青年がいた。それはヒール宮井が弱冠20歳のときの**ピンピンお兄ちゃん物語**でもある。

最終目的地は金髪・ブルーアイの宝庫オーストラリアである。今は、なくなってしまう事業だが、北海道における経済農業協同組合連合会であるホクレンは1960年代から海外、特に米国、カナダに農業研修生と言うフレコミで、将来の北海道農業に役立たせようと、主に北海道の若き生産者を送り出していた。その結果、ヒール宮井のような逸材を生み出したのだから、やはり感謝の言葉を忘れずに添えておこう。

個人的には米国に行きたかったが、親と相談して、季節が逆で冬期間ならと言うことで、同じ英語圏であるオーストラリアの夏の農業を経験することになった。

成田からの出発は台風の影響で4時間遅れの出発となった。当然フィリピンに到着するのも4時間遅れである。マニラ到着後はアムステル

ダム発マニラ経由シドニー行きに乗る予定であった。若いと言うことは素晴らしいことだ。どう考えてもシドニー行きの飛行機は出発しているのに、後先を全く考えていない無鉄砲さが残る青春真っ盛りの頃でもあった。マニラではトランジットであったので、入国審査のラインに並ばないで、通過エリアに行こうとすると、フィリピンの入国審査官が近づいて来てパスポートの提示を求められ、最終目的地を聞かれた。

審査官は「シドニー行きはもう出発したよ」と言う。だよな

と、驚きはしなかったが、内心どうすべきか、私の澁みのない目が天を仰いでいたのだろう。そして、そんな気弱さを入国審査官はしっかりと見透かしていたのだ。

「ほら、あそこにいる男に案内させるから入国をして、とりあえず今晩は一泊して、明日、出国しなさい」と優しいお言葉をかけていただいた。

その指差した方向を見るとお兄ちゃんが、山本リンダの手の動きの様

バイオ農業先達国、フィリピンに行きましょう！(2)

Vol.53



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

にカモンポーズを取っていた。しかし、どの角度から見てもそれは明らかに怪しい雰囲気アンプンの、小チンピラ風なのだ。それを見て、私は「入国しません！

トランジットエリアで一泊します」と宣言してしま

った。弱冠20歳のピンピンお兄ちゃんの堂々とした態度に恐れ慄くかと思いき

や、入国審査官は「それじゃー、入国はしなくても良いから、検疫を受けてくれ」

オレにも言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

と言い30mほど離れた小部屋に連れて行かれた。

部屋に入ると入国審査官と検疫担当者はコンコン話を始めた。そして、再度パスポートの提示を求め、「スモールボックス(天然痘)の予防注射をしていませんね」「もし注射をしたくなければ、一人100ドル支払なさい、さーどうする?」

と注射針に手を伸ばしているではないか。あゝこれで一本盛られて、あの世行きなのか、まさか金髪・ブルーアイとの親善交流なしに、この男どもから私のお尻の未体験ゾーンを……と妄想しながらも、私は慌てず、「予防注射は特定の地域に行く場合に必要で、マニラの飛行場にいる限り必要はないと聞いています」と威風堂々と答え、ドアを開け退出した。実はそのとき私は一人ではなかった。中標津、別海からは男性2名が、音威子府からは女性1名が農業研修に向かっていた。その女性が半べそをかき始めた、とでも書けばコラム的には面白いのだが、後から聞くとここでは何を言っているのかわからずキョトンとしていたと言う。

怪しい検疫小部屋を出ると、やはり入国審査官と検疫官が追っかけて来た。「さーどうする?」と思った瞬間、目の前にKLM(オランダ)の制服を着たクルーが歩いてきたの

で、さすがの思いで助けを求めた。そしてこの10分間に起きたことを説明すると彼らは「あゝ、その飛行機に乗って我々もシドニーに行くんだよ、ついて来なさい」と言う。実はアムステルダム発マニラ経由シドニー行きも遅れて到着していたのである。そうです、あの2人の官憲は我々を騙そうとしたのです。遠巻きに覗きこむ官憲は小銭を稼ぎ損ねたことに地団駄を踏む様子をはつきりと読みと取れました。

幻のスギ花粉症緩和米

ここまでのことを経験したら、普通の人はフィリピンの地に足を踏み入れてみようと思うだろうか? まっ、英語ができない、どこかの農協・観光ツアーに参加するスケベー野郎は目的が違うから行くんだろうな……。そんな連中とは違い、岩見沢、南幌、長沼のまじめオヤジ軍団は今回2月1日から4日までのフィリピン・ツアーを行なうに当たって、自分なりに思い悩むこともあったが、この10数年のフィリピンでのバイオ(GM)のめざましい発展を見ると、やはり現場を見るのが一番だと考え直すこととなった。

ゴールデンライスと言うお米をご存じだろうか? 外見は黄色と言うか、正しくゴールデンの色をし

た遺伝子組み換えのお米である。フィリピンでは、あと数年で一般栽培されるこのお米は、現地の貧困層に見られるビタミンA不足を解消すべく、このお米を食べればビタミンA不足にはならない救世主となるのだ。どこかのアホーはきつと、「ビタミン剤でも飲んだ方が早いんじゃないの?」とでもツイッチャウのだろうが、そのビタミン剤を買うことさえ大変な地域も存在し、**普通に食するだけで健康が維持できる**のだから、素晴らしいお米になりそうだ。

この開発には日本人をはじめ世界中の研究者が参加していて、あのモンサント、シンジェンタ、バイエルなどはIRRI(国際稲研究所)に特許の使用を無償供与していると聞く。その研究所では日本の品種、日本晴もクロス(品種の掛け合わせ)に使っていると話していた。あゝそういうえば、つくばの研究所でもスギ花粉症緩和米のクロスにもやはり日本晴を使っていましたね。聞くところでは日本晴はスギ花粉症緩和の遺伝子を導入しやすいので、積極的に利用されているらしい。

ただ、さーこれからスギ花粉症緩和米をやるうと言う段階で、厚生労働省が文句を言い始めたらしい。花粉症緩和米は医薬品に該当する」と

判断したのだ。よって現在では、その**医薬品としての臨床試験**に必要なデータの収集をしなければならなくなってしまった。バカとアホーと負け組と変態野郎のケツの穴の清潔度検査の様なものだ。てめーらのケツはみんな汚いんだよ、と言う意味である。

バイオが普及して生き残った生産者が儲かって、国税の財務省がホクソエムのは理解できても、不耕起栽培で土壌流出がないと認められれば国土交通省が出て来るのか? いや、まして、生産者の子供たちが今以上に学力が付いて、「日本はやっぱりおバカな国だった」と知られては困るので文部科学省がしゃしゃり出る?

もしかして、みんなが守るべきものが違うことが分かって、防衛省が最後に物言いか? 結局は日本では日本晴系のスギ花粉症緩和米のみで、多くは**海外で作られることになるのはだれの利益になるのか?** まっ、どれにしても賢い選択ではなさそうだ。ほら、溜池山王当たりの治外法権からは「お前ら真性負け組のバカか? 書類や手続きだけでバイオが語れるのか? 本当は作れないし、運営できないんだろ、原子力発電所みたい……」と間違いない言われているだろう。続